

## 第10回記念全国大会特集号

- [第10回記念全国大会を振り返って](#)
- [大会事前企画\(基礎研修・専門研修\)](#)
- [本大会\(1日目/基調報告・大会シンポジウム\)](#)
- [本大会\(2日目/口頭発表・課題研究分科会 他\)](#)
- [事務局だより](#)

---

## 第10回記念全国大会(福岡大会)を振り返って

大会実行委員長 門田 光司(久留米大学 教授)

今回の記念全国大会では、大会テーマを「学校ソーシャルワーク実践の動向と今後の新たな展開～10年目の起点～」としました。なお、裏テーマは「参加者の皆様に福岡のパワーを持ち帰っていただくこう!!!」でした。学会発足から10年目を迎え、その間、一番の驚きをもった出来事はやはり2008年度の文部科学省による「スクールソーシャルワーカー活用事業」の開始でした。しかし、学会としてはこの事業を通して、「学校においてソーシャルワークが実践されているのか?」を調査するため、2回の全国実態調査を実施しました。今回、本大会では「学校ソーシャルワーク実践の動向」として2回目の調査結果を報告していただきました。現状としては、学校ソーシャルワークが十分実践されているとは言い難い現状でした。この報告を受けて、今後も学会として学校ソーシャルワーク実践の普及と実践研究の蓄積によって社会貢献をしていくことの必要性が確認されました。

10年目の起点として、大会テーマの「今後の新たな展開」では特別支援教育における学校ソーシャルワーク実践の必要性を掲げました。スクールソーシャルワーカー活用事業が小・中学校から高等学校へと配置対象校を広げていく経緯にありますが、学校ソーシャルワーク実践が主に生徒指導分野に位置づけられています。また、近年では子どもの貧困対策面でも学校ソーシャルワーク実践への期待がもたれてきています。しかし、学会設立趣旨に掲げていますように、「学校ソーシャルワークは、子どもの人権と教育及び発達を保障していくことを目的に、学校・家庭・地域が一体となって支援していくことを基盤にした援助方法」です。この目的から当然、学校ソーシャルワークによる支援は特別支援教育の子どもたちにも欠かせないと考えますし、本大会シンポジウムでもその必要性が示されました。学会としても特別支援教育における学校ソーシャルワーク実践の研究が今後一層発展していくことが望まれます。

大会2日目の自由研究発表及び課題別分科会でも多くの方々が参加していただき活発な議論が展開されました。ただ、各部屋の定員数が決まっていた関係から希望される参加者がその部屋に入れないというご迷惑をおかけすることになり、お詫び申し上げます。

今回の記念大会では、北海道から沖縄まで330名を超える方々に参加していただき、大盛況で終わることができました。特に福岡県スクールソーシャルワーカー協会のスタッフによる参加者へのおもてなしと情報交換会での裏テーマをふんだんに発揮したアトラクションをさせていただきました。大会に参加された皆様が福岡大会にて学びと元気を持ち帰っていただけたのであれば本大会は大成功であったと思います。

最後に、大会運営にあたり、尽力をいただいた理事及び福岡県スクールソーシャルワーカー協会のスタッフ、そして学会事務局に合わせ大会運営の多忙な業務にまで取り組んでいただいた奥村賢一先生に感謝申し上げます。

## 大会事前企画(基礎研修・専門研修)

### 基礎研修

「スクールソーシャルワーカーに求められるもの～学校現場が期待するスクールソーシャルワーカー～」

#### 講師

丸山 涼子(大阪府寝屋川市立和光小学校 元校長)  
森原 清(山口県周南市立和田中学校 校長)

#### コーディネーター

佐々木 千里(京都市教育委員会等 SSW・SV)

今回の基礎研修で「スクールソーシャルワーカー(以下SSW)の視点」の大切さを改めて学ぶことができました。

私がSSWとなって、教育現場という慣れないフィールドや市に一人配置という重圧、そして、表には見えにくい家庭に対する支援の困難さなどを感じながら一年が経とうとしています。そんな中、時宜を得、この研修を受けることが出来たこと、とても感謝しています。

学校現場で求められるものとして、お二人の講師が共通してお話くださったことは「SSWの視点」でした。SSWとして自信がなく、今まで伝えられずにいた意見や福祉的な考えを、自ら発信していくことが必要とされていることに気づきました。各学校に温度差があり、私自身、それを改善したいと感じてはいるものの、現場の先生たちと十分に話す時間もない状況でどう伝えていくか、どのように話せば伝わるのか、悩んでいました。しかし、この研修で、校長先生も私と同じ思いや悩みをもっているのではないかと考えることができました。そして何よりも、校長先生とSSWはもちろん、先生方や児童・生徒、家族、地域の方々、関係機関の方々と互いに「信頼関係」を築くことが非常に重要であることを学びました。SSWがその自らの視点でいくら発信しても、信頼関係がないとなかなかうまく進みません。信頼関係を構築することが、より良い、継続した支援に繋がると思いました。

また、会場からのニュアンスの異なる質問を瞬時にまとめ、非常にわかりやすく説明されていた、コーディネーターの先生がとても印象に残っています。私もSSWとして、コーディネーター力を身につけていきたいと強く思いました。

今回、「学校現場を知る」というSSWの基本に立ち返り、何が求められているのかということを確認することができました。SSWの視点をより豊かなものにするためにも、今後も研修会等に参加し学びたいと思っています。

前田 光佐子(福岡県・嘉麻市教育センター-SSW)

### 専門研修

「服薬する子どもとその保護者への対応」

#### 講師

原田 剛志(パークサイドこどものこころクリニック院長 精神科医)

#### コーディネーター

比嘉 昌哉(沖縄国際大学 准教授)

比嘉昌哉先生ご紹介のもと「パークサイドこどものこころクリニック」原田剛志先生による「服薬する子どもとその保護者への対応」の研修を受講した。前半は「服薬を必要とするケース」について発達障害全般、二次的な精神疾患、具体的に困っている子どもの様子を紹介された。子どもの「うまくいってなさ」は「この子らしさと環境との相性の悪さ」でありその結果が現在出ている精神症状(てんかんを除く)この子らしさは「発達の凸凹プラス今まで身に付けた人間関係能力」ということだった。次に児童精神科で処方される薬について解説があり、薬は病名ではなく「症状に対して投薬される」とのこと。投薬後の様子を観る時、昼の評価は教員、夜間休日の評価は家庭で観ることが必要で家庭との連携の重要性が説かれた。最後に医療や投薬とどう繋ぐといいのか、SSWとともに多職種の連携をどううまくやって行くか、後半は参加者がワークショップで今後どう活動して行くか考える機会。困ったこと、うまく行ったこと分かち合いにお互い学びあう。公立小・中学校で活動するSSWである私は「こんな子に困っている」と会議や子どもの行動観察を通して先生方から伺うことが多い。実は困っているのは子どもだが親や子どもに困り感の自覚が少なく、怖い気持ち、偏見等で医療に繋がらないケースもある。原田先生はまず当事者に「困ってもらうこと」も必要だとおっしゃる。SSWが子どもとその家庭に関われるのは学齢期に限られる。その子も持っている可能性を引き出しいいところを伸ばせるように、親も含めて子どもを取り巻く環境そのものがその子の生活の質をよりよいものとするシステムになるように、これからは私は学びを重ねつつ活動して行きたい。

大栗 万智子(大阪府・吹田市SSW)

## 基調報告A

### 「学校ソーシャルワーク実践の動向～全国調査結果の報告～」

#### 報告者

---

土井 幸治(志免町教育委員会 スクールソーシャルワーカー)  
岩田 美香(法政大学 教授)

今回の基調報告Aにおいては、岩田氏と土井氏による全国調査の報告がなされた。全国1788もの自治体を調査できるのは、学術団体であるからというのもあろう。2011年の調査結果は私も含めて共有できている。それから4年、この間様々な事象が全国各地の学校現場で報告されてきた。全国の自治体はどのように困っている子どもたちに向き合おうとしているのか、前回の調査結果と比較することで見てきた感じがする。

まず、地域による差があれば大きく見られたことには個人的に大変驚いた。ある程度の予想はしていたが、それを超えていた。調査期間を過ぎたあとも返答した自治体がいくつもあったということで、今回は中間発表という位置づけではあったものの、大まかな全体の流れをつかむことができたのは、参加者にとって大きな収穫となったのではないだろうか。最終的な調査結果の公表を心待ちにしたい。

「スクールソーシャルワーク」という言葉はこの8年あまりで学校現場にある程度浸透してきたのではないかと思われる。しかしその名前は聞いたことがあっても、それが何であるのかははっきりと理解している教職員はまだ多くないと思う。スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーの違いは何であるのかといった、教職員の理解不足もあると感じている。個人的に言えば、教育という世界はやはり閉鎖的であると感じざるを得ない。常に意識していないと視野狭窄を起こしてしまう。私は、そんな世界にさわやかなそよ風を吹かせ、新しい視点を与えてくれるのが「スクールソーシャルワーカー」だと信じている。

最後に文字通り蛇足になるが、学校現場でよく出会う言葉の一つに「連携」が挙げられる。最近、「連携」という言葉が一人歩きしているような気がしてならない。連携とは、直接自分の足で伺い会うことだと私は考えている。まず「人と人が出会うこと」から本当の意味での連携は始まるのではないだろうか。そんなことも思い巡らせながら聴かせていただいた基調報告Aであった。

田村 浩志

(愛媛県立しげのぶ特別支援学校/佛教大学大学院(通信教育課程)社会福祉学研究科社会福祉学専攻修士課程)

## 基調報告B

### 「スクールソーシャルワーカーの組織化を図る～福岡県スクールソーシャルワーカー協会の活動を通して」

#### 報告者

---

奥村 賢一(福岡県立大学 准教授)

大会1日目の基調報告Bでは、福岡県立大学の奥村賢一先生から福岡県におけるスクールソーシャルワーカー(SSWr)の発展史や福岡県SSWr協会設立までの取り組みについて報告がありました。ここでは報告を聞いて感じたSSWr組織化の必要性について述べたいと思います。

まず重要だと感じたのが組織化によるSSWr同士の横のつながりです。報告では福岡県内のSSWr同士のアットホームな雰囲気印象的でした。今大会中、福岡県内のSSWr数名とお話する機会があったのですが、実際に近隣市町村のメンバーで連絡をとって自発的に勉強会を開くなど、SSWr同士の交流の機会がよくあるようでした。そのため、困ったことがあると他のSSWrに相談をしたり、声を掛け合ったりすることもあると聞きました。こうしたSSWr同士の助け合いは、福岡県SSWr協会のつながりによるものではないでしょうか。研修会の開催によるSSWr同士の交流機会の多さや、福岡県のSSWrが着けていた「FASSW」バッジにみるようなみんな同じメンバーだという意識がこうした雰囲気をつくっているのではないかと感じました。そしてこのようなSSWr同士で支え合うための組織づくりは、今後各都道府県で必要になるのではないかと考えています。

そして、もうひとつ組織化のメリットとしてSSWrからの学校ソーシャルワークの具体化があるのではないかと思います。なぜなら福岡県SSWr協会自体が、実際に活動しているSSWrたちの「こんなことをしたい」という思いを形にするうちにできたものだからです。最初はSSWrの「何か形として残したい」という思いがSSWr活動報告集になり、「まだまだSSWrになりきれていない、このままじゃいけない」という気持ちが勉強会や研修会に発展していました。そしてその積み重ねが福岡県SSWr協会の形となり、現在新たにSSWrの育成・資質向上としてSSWr人材の推薦も行っています。このような取り組みをSSWr一人の力で実現することは不可能です。そのため、実際に活動しているSSWrの思いを具体化するためにも、組織として取り組んでいく必要があると感じました。

岡村 奈緒美(京都府立大学大学院)

## 大会シンポジウム

### 「特別支援学校における学校ソーシャルワーク実践の必要性」

#### シンポジスト

---

松原 太洋(福岡県立福岡高等視覚特別支援学校 校長)  
樋口 陽子(北九州市立小倉南特別支援学校 統括コーディネーター)  
下田 学(九州工業大学 キャンパスソーシャルワーカー)

## コ-ディネ-ター

門田 光司(久留米大学 教授)

本大会シンポジウムは、「特別支援学校における学校ソーシャルワーク実践の必要性」をテーマに開催されました。

まず福岡県高等視覚特別支援学校の松原大洋校長先生より、福岡県内の特別支援学校では知的障がいがある生徒が増加しており、また障がいが重度・重複・多様化している状況と、特別支援学校のセンター的機能の教育相談やSSW・SCなどの活用事業についてお話しがありました。北九州市立小倉特別支援学校にて総括コ-ディネ-ターの樋口陽子先生からは、小倉特別支援学校でのコ-ディネ-ターの実際の取り組みや他機関との連携についてのお話しがありました。また、お二人の先生から、実際の事例をもとにSSWの必要性についてお話しがあり、その背景としては、特別支援学校に在籍する児童生徒の障がいが多様化していることや、児童生徒が抱える課題も家庭環境や障がい特性が絡み合い複雑化していることにより、学校や医療機関、福祉機関など多く機関が関わるため、より協働・連携が重要になってきていることが挙げられると感じました。最後に九州工業大学でキャンパスソーシャルワーカーの下田学さんより依頼ケースの事例をもとに学校ソーシャルワーク実践の必要性について、個別の教育支援計画への関与や機関連携の強化などについてお話し頂きました。

今回の大会シンポジウムを通して、学校ソーシャルワークについて2点考えさせられた点があります。まず、ソーシャルワークの専門的な視点を学校現場にて発揮するという事です。後半のディスカッションの際、樋口先生の「SSWと仕事をしていて、SSWの意外な視点に目を着目するという視点は学校ソーシャルワークの強みであり、学校現場に一人で入っていくSSWは、強みが生きてくるような言動を常に意識していけないといけない」と再認識させられました。2つ目はチームの一員として動くということです。特別支援教育は、インクルージョンをもとに、障がいの有無ではなく、支援の大小はありながらも、すべての子どもに支援を展開しようとしているため、もちろんSSWもすべての子どもたちに支援が必要であると考えます。しかし、特別支援学校に在籍する子どもたちの生活の部分では、保護者や家族が抱えている負担が大きく、それゆえに課題が多くなる場合があり、子どもの健やかな成長・発達、それを支える家族の後押しになるよう、学校と各機関との継続的な連携が必要となってくると考えます。特別支援学校には樋口先生のような特別支援コ-ディネ-ターの方がいらっしゃると思いますが、その役割がSSWと重なる部分もあるからこそ、まずお互いのことを知り、チームとして動き、その中で学校ソーシャルワークの専門性を発揮していくことが重要だと考えます。

大会にて、自分自身の日々の実践を振り返る機会を頂きました。当たり前のことを着実に実践することが学校ソーシャルワークの可能性を広げていくことに繋がり、それが子どもたちの将来に繋がっていくと感じました。

田中 万里恵(福岡市教育委員会SSW)

## 本大会(大会2日目)

### 口頭発表(研究発表・実践発表)

今大会では5会場で計20本の口頭発表(研究発表11本、実践発表9本)が行われました。各会場では日頃の研究や実践の成果について発表が行われ、活発な質疑応答も繰り広げられていました。

#### 401 座長/野田 正人(立命館大学)

① 9:35 【研究発表】? オーストラリアビクトリア州におけるスクールソーシャルワーカーの現状  
～ 名城健二(沖縄大学)  
10:10

② 10:10 【実践発表】 新法施行下におけるSSWについて考える ―学習支援・きずなレッジの現場から―  
～ 渡辺 岳(神奈川県立高等学校県西地区)  
10:45

③ 10:45 【実践発表】 中学生に対するソーシャルワークサポート・学習支援に来訪する生徒と母親の関係・きずな  
～ レッジ・学習支援の現場から―  
11:20 二宮公子(学習支援プログラムきずなレッジ)

④ 11:20 【研究発表】? 日本のスクールソーシャルワーク実践スタンダード作成への試み  
～ -米国のスタンダードの日本への応用についての意識調査-  
11:55 ○馬場幸子(東京学芸大学)、望月彰(愛知県立大学)、金澤ますみ(桃山学院大学)、鈴木庸裕(福島大学)

#### 402 座長/中典子(中国学園大学)

① 9:35 【実践発表】?熊本市における学校ソーシャルワーク実践の現状と課題 ―小中学校養護教諭へのアンケート

～ ト調査を通してー  
10:10 古閑智子(熊本市教育委員会、久留米大学大学院)

②10:10 【実践発表】? 学校・家庭・地域における共通認識の成立プロセスについて  
～ 一発達障害のある子どもと保護者に対するスクールソーシャルワークからー  
10:45 ○鈴木泰子・氏家享子(東北福祉大学特別支援教育研究室)

③10:45 【研究発表】 幼児期の特別支援教育推進に向けたスクールソーシャルワーカーの関わり的重要性とその課題  
～ 一保幼小接続に焦点をあててー  
11:20 前嶋 元(東京立正短期大学)

④11:20 【研究発表】 大学生の児童虐待の認識に関する研究 ー社会福祉学科学学生への意識調査からのー考察ー  
～ 山崎千栄子(久留米大学)  
11:55

#### 403 座長/佐々木啓子(電気通信大学)

①9:35 【研究発表】 ?スクールソーシャルワークにおける協働支援の効果 ースクールソーシャルワーカーの支援事例  
～ からの検討ー  
10:10 岡村奈緒美(京都府立大学大学院博士前期課程)

②10:10 【研究発表】 ? 教師とスクールソーシャルワーカーの連携に関する研究 ー教師から見た連携プロセスー  
～ 高石啓人(早稲田大学大学院)  
10:45

③10:45 【実践発表】 児童虐待における多機関協働へ向けた学校ソーシャルワーク実践 ー面接技術を活用したア  
～ プローチー  
11:20 池田 敏(添田町教育委員会)

④11:20 【実践発表】 学校ソーシャルワーク実践における特別な教育的支援を要する児童への支援  
～ ー中学校区拠点巡回型スクールソーシャルワーカーと担任、特別支援コーディネーターとの協働ー  
11:55 蒲池 恵(福岡市教育委員会)

#### 404 座長/米村美奈(淑徳大学)

① 9:35 【実践発表】 ? すべての生徒の希望進路実現のために配置型SSWができること ー高校奨学金支援制度  
～ 活用 6年間の取り組みー  
10:10 三宅麻美(京都府教育委員会)

②10:10 【実践発表】 ? 教育保障とネットワーク ー高等学校の地域づくりへの挑戦ー  
～ ○三好 ひろみ(香川県立小豆島高等学校)、富島 喜揮(四国学院大学)  
10:45

③10:45 【研究発表】 2014 年度キャンパスソーシャルワーカーの活用状況調査 ー2010年全国調査と比較してー  
～ ○長沼洋一(東海大学)、長沼葉月(首都大学東京)、米村美奈(淑徳大学)、瀬川恵子(日本社会事業大  
11:20 学)、  
牧野晶哲(白梅学園大学)

④11:20 【研究発表】 キャンパスソーシャルワーカーの業務評価と活動内容 ー管理者評価と本人の業務評価との関  
～ 連からー  
11:55 ○長沼葉月(首都大学東京)、長沼洋一(東海大学)、米村美奈(淑徳大学)、瀬川恵子(日本社会事業大  
学)、  
牧野晶哲(白梅学園大学)

#### 405 座長/①②鈴木庸裕(福島大学)・③④岩井浩英(鹿児島国際大学)

① 9:35 【実践発表】 鹿児島県におけるSSW事業支援の有効性について  
～ 岩井 浩英 (鹿児島国際大学)

- ②10:10 【研究発表】？スクールソーシャルワーカー導入時の議論と配置・活動実態の関係について  
 ～ 一地方教育行政の適切性評価の観点を求めて～  
 10:45 ○山本裕詞(桐生大学)、山本操里(宮城県大崎市教育委員会)

- ③10:45 【研究発表】 地域課題に対応したスクールソーシャルワーク実践の試み ―参加型ワークショップとプログラム評価の活用―  
 ～  
 11:20 横井葉子(上智大学・大阪府立大学大学院博士後期課程)

- ④11:20 【研究発表】？学校福祉事業と生徒指導の問題史的検討  
 ～ 鈴木庸裕(福島大学)  
 11:55

## 課題研究分科会

### 第1分科会「児童生徒のいじめや校内暴力への対応を考える」

#### 話題提供者

早田 宗生(熊本県教育委員会 義務教育課参事)  
 大松 美輪(大阪府教育委員会 チーフ・スクールソーシャルワーカー)  
 藤林 武史(福岡市子ども総合相談センター 所長)

#### 指定討論者

野田 正人(立命館大学 教授)

#### コーディネーター

久能 由弥(北星学園大学 教授)

7月5日(日)午後は、第一分科会「児童生徒のいじめや校内暴力への対応を考える」に、参加しました。

大松氏より「学校で出会う加害課題とSSWの活動」に関して、早田氏より県のSSW活動やいじめへの対応や早期発見防止について、藤林氏より「児童福祉法や児童相談所をどのように活用するか?」をテーマに、設定をぼかしながらも具体的な事例と話題の提供がありました。

- ・子どもと教師の間で会話が成り立たない。一時不登校を経て中1から勝手な行動、校内徘徊、暴言暴力、仲間と器物破損があり、警察に相談。
- ・背景に様々な要因を抱え、対人関係のトラブルが絶えず、周囲が疲弊してしまった。
- ・児童の自宅に遊びに来ていた際の性被害加害。加害側保護者の「うちの子だけが悪いのか?」との苦情に、被害側の母親が体調を崩す。加害側児童に父から母へのDV目撃という背景があった。加害側が転出して一応の収束。
- ・警察から児童相談センターへ連絡。保護者が支援を拒み、SSWの動きが期待された。

等々、どの地域でも聞かれるような事例ばかりで、発達障害や愛着障害を持つ、担当地域のケースに重ねて真剣に聞き入りました。

その後、野田先生より学校と警察の連携に関し、新聞で報道された3事例について自治体がまとめた報告書から見える問題点～課題(アセスメント欠如～危機管理・情報共有・小中高の引き継ぎ・機関連携・制度の研修)や、教委の中間報告から見える問題点～再発防止策(不十分な確認・危機感の欠如～長期欠席者の調査・連絡票の活用・連絡方法の確認・学警連の締結)の整理や解説を頂きました。

久能先生のコーディネートのもと、意見交換も活発になされていました。14歳になる前にしておくべきこと、「今さえ良ければ…」で生じるタイムラグと弊害、SSWの目標は「子どもが安全安心の中で登校できること」、課題ある学校の問題解決のために残す記録、被害児童が語る確かさと事実確認面接、熱心な保護者が陥りやすい教育ネグレクト…についても、参加された方々それぞれに具体的に考えを深められたものと感じています。

K(神奈川県内SSW)

## 課題研究分科会

### 第2分科会「子どもの貧困対策とスクールソーシャルワーカー」

#### 話題提供者

安部 計彦(西南学院大学 教授)  
 徳成 晃隆(福岡市教育委員会 教育支援部長)  
 梶谷 優子(福岡市教育委員会 スクールソーシャルワーカー)

## コメンテーター

岩田 美香(法政大学 教授)

## コーディネーター

高良 麻子(東京学芸大学 教授)

2015年7月4日(土)7月5日(日)、日本学校ソーシャルワーク学会第10回記念全国大会が福岡国際会議場で開催されました。筆者は、7月5日(日)に開催された課題研究分科会の第2分科会「子どもの貧困対策とスクールソーシャルワーカー」に参加しました。

コメンテーターの岩田美香氏(法政大学教授、日本学校ソーシャルワーク学会理事)、安倍計彦氏(西南学院大学教授、日本学校ソーシャルワーク学会九州沖縄地区世話人)、徳成晃隆氏(福岡市教育委員会教育支援部長)、梶谷優子氏(福岡市教育委員会スクールソーシャルワーカー)から報告がありました。

岩田氏から子どもの貧困対策の推進に関する法律を基に貧困対策に対する問題提起がありました。安部氏の報告では、貧困とネグレクトが必ずしも関連性が高いわけではないという調査結果を紹介されていました。徳成氏、梶谷氏からは福岡市での取り組みについて報告がありました。教師、スクールソーシャルワーカーが熱心に子どもと関わり、寄り添っていくことで子どもがいきいきとしていった報告をお聞きしました。梶谷氏からコミュニティカフェに関する構想もお聞きし、スクールソーシャルワークにおけるマクロ支援の必要性も強く感じました。発表者はミクロ、メゾ、マクロレベルでの活動を報告してください、そうした取り組みを一同に拝聴でき、活動レベルの差異を実感できる良い機会となりました。

参加者からも積極的な質問があり、活発な議論が行われました。ただ時間等の制約もあり、ミクロ、メゾ、マクロレベルでの活動がどのように関連しており、今後どのように展開していくのか、といったことについては議論をさらに深める必要があるのではないかと考えました。最後になりましたが、報告者の皆様、大会運営者の皆様、参加された方々、ありがとうございました。大変勉強になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

高石 啓人(早稲田大学大学院文学研究科教育学コース博士後期課程)

### 課題研究分科会

#### 第3分科会「生活の困窮と学習支援

～夜間中学校や定時制・通信制高校の取り組みから～

## 話題提供者

田上 麻衣子(福岡県立博多青松高等学校 スクールソーシャルワーカー)

肥下 彰男(大阪府立今宮高等学校 教諭)

関本 保孝(元夜間中学教員・「えんびつの会」・「ピナット」学習支援ボランティア)

## コメンテーター

山野 則子(大阪府立大学 教授)

## コーディネーター

鈴木 庸裕(福島大学 教授)

第3分科会に参加させていただきました。現役の高校のSSWである田上麻衣子さんと現役の高校教員である肥下彰男先生、元夜間中学校先生で今は学習支援ボランティアの関本保孝さんから話題提供をいただきました。

一番印象に残ったことは福岡のSSWは若い方が多く、なかなか人材が育たないと言われているなかで、非常に元気がある県だと感じたことです。若手が経験を積み、実績を認められればSSWの評価も上がり、やがては常勤化・全校配置していくとすればここ福岡からではないかと強く感じました。大阪府の西成高校では全国でも珍しい「反貧困教育」という取り組みをしていました。生徒にどうして貧困になるのか、ということを考えさせ、自分がその連鎖から抜け出すにはどうしたらいいかを自ら考えさせる取り組みを学校でやっているということに驚きを隠せませんでした。「西成」という地名にはなんとなくマイナスのイメージがありますが、西成学習を経て生徒たちが地域とそこに生きる自分にプライドを持つ様子に心打たれました。一方的に知識を与えるだけでなく学習の過程でワークシートに書き込まれた生徒の言葉を拾うという視点はSSWの原点だと思いました。

夜間中学校の設置は地域差が大きく、一般にはほとんど知られていないのが実情ですが、不登校がこれだけ大きな社会問題になっており、実際に中学校に登校できないまま学齢を終えてしまう生徒がいるという事実があるのに、中学校のやり直しをする機会がないという視点が欠けていたことを、SSWを志す者として恥ずかしく思いました。コメンテーターの山野則子先生は中教審の委員をされており、夜間中学が今国会で法制化され、各都道府県に最低一つは必置になる見込みとの情報をいただきました。今後の夜間中学の動向に目を向け、機会があれば夜間中学の設置に関わってみたいと思いました。

川浦 典子

## 話題提供者

---

児玉 聡(福岡市立吉塚小学校 教頭)  
梅山 佐和(京都市教育委員会 スクールソーシャルワーカー)  
岩井 佑美(熊本県教育委員会 スクールソーシャルワーカー)

## コメンテーター

---

岩永 靖(九州ルーテル学院大学 准教授)

## コーディネーター

---

佐々木 千里(京都市・静岡県教育委員会等 SSW・SV)

学校ソーシャルワーク学会が設立されて、10年目にして初めて「コンサルテーション」に焦点をあてた分科会とのことである。これまで研究誌でも学校ソーシャルワーク実践に占めるコンサルテーション業務の割合の高さはしばしば記されていたが、学会でテーマとして取り上げられるのは初めてとのことで興味をもって参加した。

最初に福岡市の児玉氏から学校教員の立場から見たSSWのコンサルテーションに対する期待について述べられた。教育相談の歴史的発展の経緯から、年配の教員は「自分が頑張りたい」、若い教員は「専門家にゆだねたい」という思いが強いこと。教員の困り感はほとんど授業中に実感されるものであり、子どもの背景にまで十分に目が行き届かないこと。こうした教師の背景を知り、コンサルテーションに役立てる必要性が示唆された。

京都の梅山氏からは配置型のSSWとしてコンサルテーションを行う際のいくつかのコツが提示された。学校アセスメントを行うこと、かかわる教員の一人一人について考え方のくせや情報の受け取り方の特徴などを把握し、忙しい教員にいか「伝わる」仕方メッセージを提供するかを工夫されている様子うかがわれた。またBio-Psychosocialモデルの枠組みを使って客観的に情報を共有し、Socialの部分については子どもと家族や学級(メソ)との関係性、子どもと地域(マクロ)との関係性を意識しながら話し合うという協議の姿勢が印象的であった。

熊本県山鹿市の岩井氏は、広域派遣型のSSWとして学校からの要請を受けて初めて事例にかかわるという点で常に事後的に関与せざるを得ない立場についてご説明があった。そのため、信頼され要請されるSSWとなるためにも学校からの要請にコンサルテーションで応えていらした。その上で、限られた時間の中で学校からの聞き取りを丁寧に行いつつ、子ども中心の支援をどのように実現していくか、SWの価値を常に意識しながら誠実に取り組んでいる様子うかがわれた。

その後のディスカッションの中では、学校に様々な職種が様々な形態で関与していく中で、SSWには直接支援が望まれないケースもあること、そのような中でSSWのアセスメントとして子どもの社会的背景に目を向けること、教職員に伝わる言葉や形式を工夫すること、SSWと教職員が協働することでモデリング機能を果たしうること、などが話し合われた。子どもを真ん中においたコンサルテーションの実践的な方法論の検討がさらに重ねられる必要があると改めて考えさせられた。

長沼 洋一(東海大学)・長沼 葉月(首都大学東京)

## 話題提供者

---

和田 俊人(岐阜県教育委員会 特別支援教育課長補佐兼特別支援学校整備係長)  
山本 操里(宮城県大崎市・栗原市・南三陸町 スクールソーシャルワーカー)

## コメンテーター

---

富島 喜揮(四国学院大学教授)

## コーディネーター

---

比嘉 昌哉(沖縄国際大学准教授)

分科会5は「特別支援教育と学校ソーシャルワーク」というテーマで2名からの報告とフロアとのやり取りが行われた。最初に特別支援教育の視点から和田氏による報告があった。2007年の特別支援教育スタートから9年目を迎えるとする中、特別支援学校への入学者数は増加傾向にあり、特別支援コーディネーターに求められる役割が増えている現状が報告された。その中で特別支援教育コーディネーターとスクールソーシャルワーカーとが予防的な役割の中で協働する場を拡大していく必要性を指摘されていた。次にスクールソーシャルワーカーの視点で山本氏からの報告があり、特別支援教育コーディネーターと協働する機会はあるが、一方でその役割分担が不明確になるケースやスクールカウンセラーとの混同があり、支援が混乱するケースの報告があった。協働して支援を実施するにあたっては、支援における共通点や相違点を互いに理解し役割分担をしていく必要があるとの指摘であった。



いずれも、スクールソーシャルワーカーや特別支援教育コーディネーターが共働する上では、教育的視点と福祉的視点の異なる視点でケースに対して焦点化をしていることを改めて意識することが重要だと感じた。そしてミクロ、メゾ、マクロレベルでそれぞれ重なり合う役割をどのように整理するかがニーズの高まりを見せる特別支援教育をベースにしたケース対応の中ではポイントになると感じた。スクールソーシャルワーカー活用事業は特別支援教育とほぼ同時期に開始されたものである。教育と福祉という視点の違いはあるが、現場でその求められる役割は近接している部分も多くあり、互いにそれらを意識しながら、子どものニーズに応じた支援に結び付けていく必要性を感じることでできた分科会であった。

山中 徹二(大阪人間科学大学)

## 情報交換会

大会初日の7月4日(土)には、夕刻より福岡国際会議場1Fレストラン「RACONTER(ラ・コンテ)」で情報交換会が催されました。会場は100名を超える参加者で熱気に満ち溢れていました。情報交換会では参加者同士の交流をはじめ、新旧理事の挨拶、さらには大会実行委員を中心とした「SSW48」による余興で大変な盛り上がりとなりました。

2016年度の全国大会の開催地決定!!  
日本学校ソーシャルワーク学会第11回全国大会  
法政大学 多摩キャンパス

〒194-0298 [東京都町田市相原町4342](#)

2016年8月27日(土)、28日(日)

来年の全国大会は、8月27日(土)、28日(日)の二日間の日程で、東京での開催が決定いたしました。会場は法政大学・多摩キャンパスです。

大会テーマやプログラム等については内容が決まり次第、学会ホームページ(<http://www.jsssw.com/>)やメルマガジン等で随時お知らせいたします。現在、関東地区の世話人を中心に大会実行委員会が組織され、大会に向けた準備がスタートしております。10周年を迎えた日本学校ソーシャルワーク学会の新たな一歩を踏み出す大会に、全国から多くの皆さまのご参加をお待ちしています!!

## 事務局だより

### 1. 第4期理事選挙結果のお知らせ

日本学校ソーシャルワーク学会会則第15条任期満了に伴い第4期理事選挙を行いました。7月4日(土)に行われました2015年度年次総会において、下記の12名の理事が承認されましたのでご報告いたします。

理事(代表) 岩田美香(法政大学)  
理事(副代表) 高良麻子(東京学芸大学)  
理事(事務局長) 奥村賢一(福岡県立大学)  
理事 岩永靖(九州レテール学院大学)  
理事 大崎広行(巨白大学)  
理事 大塚美和子(大阪府教育委員会)  
理事 金澤ますみ(桃山学院大学)  
理事 久能由弥(北星学園大学)  
理事 佐々木千里(京都市教育委員会)  
理事 田中尚(岩手県立大学)  
理事 比嘉昌哉(沖縄国際大学)  
理事 山野則子(大阪府立大学)

※代表・事務局の他は五十音順

>>>>> 担当委員会 <<<<<<

研修委員会

◎佐々木、大塚、久能、岩田

研究委員会

◎比嘉、金澤、田中、高良

編集委員会

◎岩永、大崎、山野、奥村

※ ◎印は委員長

### 2. 計報

久能由弥さんの計報に際して

岩田美香

本学会の理事である北星学園大学の久能由弥さんが、2015年9月23日に永眠されました。

彼女は、2011年から体の不調に気づき、その後、病氣と付き合い、また戦いながら、仕事と家庭生活を続けて来られました。私が最後に元気な彼女とお会いしたのは、本年の7月に福岡で行われた本学会の全国大会であり、彼女と福岡の海を眺めながら話した会話を思い出すと、今でも目頭が熱くなります。

お葬式では、たくさんのきれいなお花と教え子たちに囲まれて、生前の久能さんの人柄が偲ばれました。また祭壇に飾られたお写真は、いつも私たちが思い出す彼女の優しい笑顔で、その笑みに心が和まされるとともに、彼女がいなくなってしまったことの寂しさを改めて覚えます。

葬儀式次第には、「家族と愛し合い、与えられた働きに誠実に向き合い、この世でのいのちを生き抜いた」と記してあります。久能さんは、これからも残されたご主人とお嬢さんを天国から見守っていくことと思います。

スクールソーシャルワークに関しては、北海道でのスーパーバイザーに就任され、本学会においても理事として活躍していただきました。研究でALS患者問題にも取り組まれていたこともあり、スクールソーシャルワーク実践においても、常に一人ひとりの尊厳を大切にされていたのだと思います。私たちは、久能さんの心優しい思いと強い意志を引き継ぎ、日々の実践や研究・教育に力を尽くしていきたいと思えます。

久能さん、どうもありがとうございました。どうぞ安らかにお休みください。

### 3. 理事会報告

---

下記の日程および内容にて理事会が開催されました。

#### 1)2014年度 第3回理事会

- 日時 2015年3月27日(金)14時00分～17時00分  
場所 福岡国際会議場 505会議室  
出席者 9名(うち、2名はオブザーバー)※常任理事会  
議題 ①入会審査  
②第10回記念大会の開催に関する諸検討(大会プログラム、会場下見等)  
③第11回大会開催校の選定  
④全国自治体実態調査に関する進捗状況  
⑤学会ホームページ管理委託先の検討 他

#### 2)2015年度 第1回理事会

- 日時 2015年7月3日(金)15時30分～17時00分  
場所 福岡国際会議場 505会議室  
出席者 10名(欠席者2名)  
議題 ①入会審査  
②第10回記念大会の最終確認  
③2015年度年次総会に関する打ち合わせ  
④第11回大会開催校の選定  
⑤第4期理事選挙開票結果の報告 他

#### 3)2015年度 第2回理事会

- 日時 2015年9月13日(日)11時30分～15時20分  
場所 アットビジネスセンター-東京駅 306会議室  
出席者 12名(うち1名はオブザーバー、欠席者1名)  
時間 15時30分～17時00分  
議題 ①新規入会審査および手続き方法  
②監事候補者の選出  
③全国自治体実態調査  
④第10回記念大会の振り返り及び反省等  
⑤第11回大会の企画及び準備等 他

※次回、第3回理事会…2015年12月に大阪にて開催予定

### 4. 【重要】 『学校ソーシャルワーク研究 第11号』

---

既に学会ホームページ等でお知らせしておりますが、日本学校ソーシャルワーク学会誌『学校ソーシャルワーク研究』の第11号は、投稿募集期間を延長することになりました。つきましては、会員の皆様から多数の投稿をお待ちしております。

投稿期限は12月31日(水)の消印有効です。

なお、投稿に関する規定および執筆要領等は学会ホームページ([https://www.jsssw.jp/modules/page\\_07/index.php/index.html](https://www.jsssw.jp/modules/page_07/index.php/index.html))よりご確認ください。

<原稿の送付先>

〒860-8520

熊本市中央区黒髪3丁目12-16

九州ルーテル学院大学 岩永研究室気付

日本学校ソーシャルワーク学会編集委員会 宛

## 5. 2015年度会費納入のお願い

---

今回、2015年度会費(過年度分も含む)未納の会員には、振込用紙を添付しております。年度内に指定口座へ振り込みを完了していただきますよう、円滑な学会運営にご理解とご協力をよろしくお願いいたします。なお、ご不明な点がありましたら、お気軽に学会事務局までご連絡ください。

## 6. 会員情報に関する変更手続き

---

所属先や住所等に変更がある方は、学会ホームページよりダウンロードした「記載事項変更届」に必要事項をご記入のうえ、事務局に郵送またはFAXをしていただくか、変更内容に関する情報をメールにてお知らせください。

## 7. 学会メーリングリストのご案内

---

当学会では学会メールマガジンを事務局より配信しています。メールマガジンの主な内容は①事務局日より(学会活動に関する諸連絡および情報提供等)、②会員掲示板(各地域で行われる研修や行事等に関する諸連絡および情報提供等)です。なお、本メールマガジンは希望者限定のサービスとなっています。配信を希望する方は事前に登録していただく必要があります。登録方法については、下記をご参照ください。

### 1)メールマガジン配信希望者

メールマガジン配信希望者は、学会事務局アドレス(k.okumura@fukuoka-pu.ac.jp)に登録希望メールを送信してください。送信していただくメールには、件名に「学会メールマガジン配信希望」と記していただき、本文では必ず氏名を入力してください。学会事務局でメール受信ならびに諸手続が終わりましたら、登録完了のメールを学会事務局より送らせていただきます。

### 2)メールマガジンへの情報掲載希望者

メールマガジン及び学会ホームページでの情報配信を希望される方は、事務局(k.okumura@fukuoka-pu.ac.jp)まで必要情報をメールにて送信してください。①件名には「学会メールマガジン情報掲載依頼」と記してください。②本文の最後には情報発信者の氏名と所属を記してください。③学会ホームページへの情報掲載希望の有無について記してください。なお、掲載情報については、必要に応じて文章を加筆修正することがありますので予めご了承ください。また、学会ホームページへの情報掲載については、数日の時間を要する場合もあるため、急を要する依頼にはお応えできないことをご理解いただいたうえで、ご対応をよろしくお願いいたします。

## 8. 会員報告

---

### 1)会員数 425名(2015年9月13日現在)

※当学会への新規入会希望者を対象に行う入会審査は、原則として理事会にて行います。理事会は年4回開催され、今年度は7月、9月、12月、3月の予定で行われます。推薦人となる会員の皆さまも予めご留意ください。

## 日本学校ソーシャルワーク学会事務局

---

〒825-8585 福岡県田川市大字伊田4395番地  
福岡県立大学人間社会学部社会福祉学科  
奥村賢一研究室気付  
TEL・FAX 0947-42-1426  
ホームページ <https://www.jsssw.jp/>  
発行責任者:奥村 賢一(日本学校ソーシャルワーク学会事務局長)